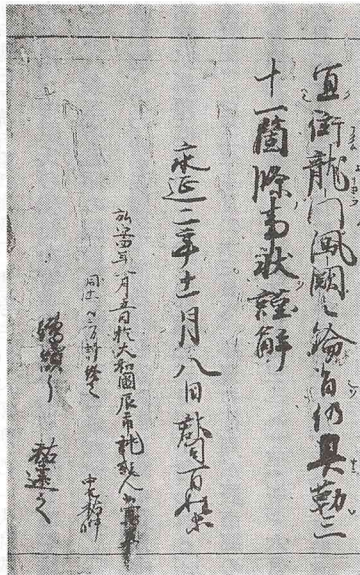


中臣祐仲と祐建をめぐって

——「尾張国郡司百姓等解文」の奥書から——

久保 尾 俊 郎

中臣祐仲と同祐建は館蔵資料中最も著名なものの一つで、重要文化財に指定されている「尾張国郡司百姓等解



中臣祐仲と祐建をめぐって

文」一巻（荻野研究室収集文書 文庫12・1）の巻末奥書・識語に登場する人物である。すなわち、

弘安四年八月五日於大和國辰市詔或人書写畢

同十一月三日讀終之 中臣祐仲

傳領了 祐建之

とある。この三行は本文と異筆であり、前二行と三行目も筆が異なる。奥書によれば、中臣祐仲が弘安四年（一二八二）八月に「或人」に注文して「尾張国解文」の書写をさせ、三ヶ月後の十一月に「讀終」して、それを百年余り後の祐建が「傳領」したわけである。二人は共に奈良の春日社家の人物に比定されている（『新修稲沢市史

資料編三「梅村喬氏解説」。書写された場所の「大和國辰市」は、中臣氏の先祖が常陸国鹿島から上洛して平城京左京八条二坊五坪の辰市郷を賜ったとされている（『古社記』）いわゆる故地である。弘安四年当時の正預中臣祐貴が新預になった時、この地で三日厨が行われ（『中臣祐賢記』弘安二年正月二十三日）、拝賀の行列が辰市郷の宿所を出発したという。また、嘉元三年（一一三〇五）六月二十六日に正預中臣祐良はこの地から状を發し（『春日若宮神主祐松記』）、祐良の孫祐為は暦応四年（一一三四一）九月辰市で『春日社記』を書写している。

文永・弘安年間は社会の転換期で、春日社でも各地で社領訴訟が頻発しており、こうした際、春日社は藤氏長者（藤原撰関家）にむけて社解（神主・正預・若宮神主の三惣官を中心にして發する申状）を提出した。また中臣祐仲や祐建等社司・氏は社領の名主として百姓からの訴訟を受け、上洛して藤氏長者に子細を申し出る立場にあった（『中臣祐賢記』文永十年七月三日）。

中臣祐仲は、『続群書類従』所収の『中臣氏系図』で見ると、春日社神宮預であった時風の流れの、正預祐房（春日若宮神主祖。後の千鳥家）から四代目にあたる権預祐峯の一男祐季に相当すると考えられる。すなわちその傍注に「祐季改仲」とある。国立公文書館（内閣文庫）蔵の『中臣氏系図付補任署名』には同人に「弘安二年六月廿四初参」と朱注が施されている。

東大史料編纂所蔵の『中臣社司補任』中の『権預補任次第』によれば、祐仲初参の年、祖父祐廣は七十七歳、父祐峯（祐廣二男）は三十六歳であった。他の氏が十四、五歳で元服・初参していることが多いことからしても、「尾張国解文」の書写を注文した、初参から二年後の弘安四年では、祐仲は十代の後半にさしかかる年齢であったと考えられる。

館蔵の「尾張国解文」の本文は一筆で書かれているが、付された送り仮名や訓読仮名は最初の書写から幾人もの人によって随時付け加えられていったことが書誌的調査によって明らかにされている（『早稲田大学蔵資料影

印叢書 古文書集一』福井俊彦氏解題）。その付された仮名

の特徴として指摘できることの中には、なぞり、書き改めが多いこと、また稚拙な文字が目についたり、新たに語釈が付け加えられたり、さしてむずかしいとは思えない言葉に訓読仮名が付けられているといったことがある。このことから鎌倉時代の春日社家で書写・伝領された「尾張国解文」は、十代後半の祐仲のように、若くて比較的初学の人々が参加して読み継がれ書き継がれていたことが想像される。奥書にあるとおり、書写から三ヶ月近く経って祐仲が「尾張国解文」三十一箇条を「讀終」していることもそのことを示唆しているといえよう（但し現存本は第十四条の途中から第三十一条のはじめまでを欠く）。

祖父祐廣が次預、父祐峯が権預といった社司になったのに対して、祐仲は氏人で終わった人でその事蹟でわかることは多くない。弘安二年六月の初参以後では、

弘安十年（一二八七）十二月二十一日。氏人見参『春日

社造替記下』

中臣祐仲と祐建をめぐって

正安三年（一二〇一）三月十六日。社頭警固役（春日若

宮神主祐春記）

正和二年（一二三三）七月二日。社頭警固役（同右）

といった経歴がわかり、

嘉暦四年（一二三九）六月十五日。中臣能高に越えられて権預になれず（『権預補任次第』）といった事実が史料から知られる。

父祐峯は六十歳で権預になったが、この時祐仲は六十代の半ばの年齢であり、権預職を所望して自ら藤氏長者に申文を提出したものと思われる。春日社の三惣官（神主・正預・若宮神主）のうち、正預方の社司に欠員が出た場合、数家に分かれていた中臣氏から、各々所望する氏人が上洛して藤氏長者に申文を提出し選任を願い出ることになっていた（『中臣祐定記』寛元四年三月十二日）。祐仲と同時代の春日社の社司・氏人は貴族への志向が強く、位階と官職を得ているものが多かった。預職を所望する申文は貴族の除目の際におけるそれに等しく、選任を願う氏人は摂関家の心情に訴える文を作成する必要に迫ら

れたものと考えられる。東大史料編纂所蔵の『春日社若宮神主文書』中の『大中臣申状案』を見ると、若宮神主職を一家相承したとされる若宮神主千鳥家の人々でさえ、祐房以来代々若宮神主職を所望して申文を提出しており、その際先祖の書いた申文を参考にして案文を作り、文章の完成に努めていた様子が伺える。

こうした事情が、頻発していた社領訴訟で申状を作成する立場にあったこととともに、鎌倉時代の春日社家の人物が三百年程前の訴状である「尾張国解文」を書写し、それを若い氏人が熱心に読んで勉強していた事実の背景にあったと考えられる。

「解文」は当時「尾張国申文」とも呼ばれ（『東大史料編纂所蔵本』奥書）、四六駢儷文を含む一種の名文として世に知られていた。「解文」から佳句を抄出した鎌倉時代の書写になるといわれている「尾張国申状」（『仲文章要文』一冊に合綴）が現在の神奈川県立金沢文庫に所蔵されている（関靖氏編『金沢文庫本図録』解説）。

それにしても中臣祐仲が存命中に「尾張国解文」の他

の現存古写本、東大史料編纂所蔵本（応長元年（一二二二）補写）、真福寺蔵本（正中二年（一三二五）写）も書写されていた可能性が高いことは興味深い。

○

「尾張国解文」を伝領した中臣祐建は、祐仲と同じく春日若宮社家（千鳥家）の人で、祐仲の祖父祐廣の兄祐幸から六代目、祐仲から百年余り後の足利將軍時代の人である。「辰市家系譜」（『春日神社文書第三』）によると、応永十年（一四〇三）権預、文安二年（一四四五）正預、康正三年（一四五七）卒（八十四歳）とある。

足利將軍家は二代義詮、三代義満と南都保護につとめ、それによって春日社も繁栄した。祐建が社司であった五十年余りの間は、四代將軍義持から八代義政の時代にあたる。その間祐建は六代將軍義教、七代義勝と同名になるのをはばかって、祐憲、祐勝、祐憲と名を変えている。

祐建は『臨時御神樂之記』 応永十三年六月―同閏六月、『春日社御造営記』 応永三十四年、『御造替日記』

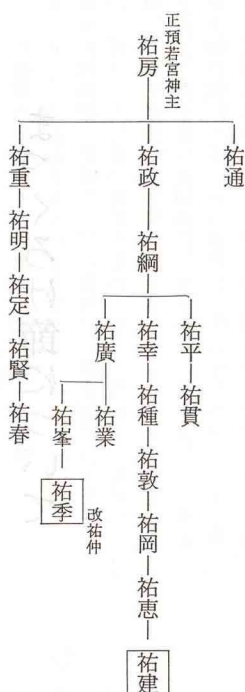
文安二年—同四年』といった春日社の記録（日記）を書き残している。

春日社家は鎌倉時代に京都の貴族から「日記家ト聞食」されており（『中臣祐定記』寛元四年三月二十三日）、社家の人々は多くの日記を残した。それを子孫が書写したり修補しながら今日まで伝領してきたのである。

春日社家の日記には、公務日誌である社家日記のような日次記と、御八講日記、衆所日記、造替日記といった、特定の事柄について記録した祐建の残したものと同

〔参考〕（『新修春日社司補任記』大東延篤編による）

千鳥家系図中臣姓



中臣祐仲と祐建をめぐって

一性格の別記・部類記の二種類のものがあつた。それらは社家の記録として残すために、また子孫の参考に資するためには作成されたものであつたが、そのどちらにも共通する特徴の一つは、到来した多数の文書をそのまま書写して日記に記載していることである。その際、申状のように長文で詳細にわたる場合は別紙に書き写している（『中臣祐賢記』建治元年八月七日）。

弘安四年八月に大和国辰市で中臣祐仲の注文で書写された「尾張国郡司百姓等解文」も、文書を日記等に書写し、そうした方法で保存しておく習慣のあつた春日社家の中で継承され、百年後の中臣祐建に伝領されていたものと考えられる。

（くぼお としろう 図書館特別資料室）